

# イスラーム世界を支配した トルコ系王朝

## トルコ系民族の移動

トルコ系民族は現在、ユーラシア大陸の広大な地域に分布するが、その大規模な移動・拡散はおもに10～13世紀に行われた。

1071年

**マンジケルトの戦い**  
セルジューク=トルコがビザンツ軍を破る。のちの十字軍遠征のきっかけとなる。



10世紀  
12世紀



軍事奴隷だった  
トルコ人が力をつけ、  
イスラーム世界の  
実質的支配者となる。

### イスラーム帝国各地で シーア派勢力が台頭

アッバース朝は、8世紀末に最盛期を迎え、首都バグダッドは大いに繁栄した。しかし、9世紀末以降は地方政権の自立などによって衰退しはじめた。

10世紀には、チュニジアにシーア派のファティマ朝が興り、エジプト、シリアに版図を拡大した。同じころ、ペルシアにシーア派のブワイフ朝が建てられた。この王朝の統治者は大アミールと称し、アッバース朝のカリフの権威を認めた。また、のちに多くのイスラーム諸国で実施されるイクター制(軍人に給与の代わりに徴税権を与える制度)を初めて取り入れた。

### トルコ人、軍事奴隷からのし 上がり、バグダッドを落とす

イスラーム世界の東部では、マムルークとよばれる軍事奴隷(トルコ人が多い)が台頭していた。10世紀半ばに成立したカラハン朝で、イスラーム教への改宗が進んでいたトルコ人が、11世紀前半にセルジューク朝(セルジューク=トルコ)を建てて隆盛となり、1055年にはバグダッドを占領、62年にブワイフ朝は滅んだ。セルジューク朝は、官僚へのイラン人の登用、行政用語へのペルシア語採用、イクター制の実施などを行い、支配体制を固

めていった。11世紀後半には、アナトリア地方に侵入、このときビザンツ帝国の皇帝がローマ教皇に助けを求めたことが、十字軍(P74参照)のきっかけとなった。しかし、セルジューク朝の全盛期は短く、11世紀末には地方の軍団が自立するようになり、十字軍の侵入もあって、12世紀半ばに滅亡する。

### 古代の文化を近代へ 伝えたイスラーム世界

ヨーロッパがルネサンスによって文化的に大きく発展するまで、イスラーム世界はヨーロッパよりも水準の高い文化を保持していた。ヨーロッパ人が範と仰ぐ古代ギリシア・ローマの文化は、その多くがいったんイスラーム世界を経由したのち、ヨーロッパに入っている。

アッバース朝によって建てられた研究機関「バイト・アルヒクマ(知恵の館)」では、ギリシア語の文献がアラビア語に翻訳され、古代ギリシアの幾何学や哲学が継承された。これにインドの代数学なども加わり、インド数字を改良したアラビア数字(現在の算用数字)もつくられた。現在のヨーロッパ諸語には、科学関係を中心にイスラーム世界から入り込んだ語彙がかなりある。

#### アラビア語起源の英語

alcohol	アルコール
algebra	代数学
alchemy	錬金術
algorism	アルゴリズム
sugar	砂糖
cotton	綿
soda	ソーダ

Key Word

### マムルーク

イスラーム世界の軍事奴隷。おもにトルコ系などの白人奴隷を指し、アッバース朝において本格的に使われはじめた。軍事に関わるため、奴隷でありながらやがて権力を握るようになった。エジプトを支配したマムルーク朝は、トルコ系マムルークが建てた王朝で、奴隷出身者でなければ支配階級になれなかった。